

## 視点

# 「SDGs時代の保育において考えたいこと ～「人間まんなか」を超えて～」



岐阜聖徳学園大学 教育学部  
教授 松本信吾

「SDGs」という言葉が日常的に聞かれるようになって、ずいぶん経ちました。とはいえ、テレビなどではよく聞くけど、自分の生活とは関係ないという方がほとんどではないでしょうか。ましてや保育とは関係ない、幼児には難しすぎると考えている方のほうが多いと思います。ここでは、SDGsと保育のつながりについて考えてみたいと思います。

2023年にこども家庭庁が設立され、「こどもまんなか社会」が目指されているのは周知の通りです。これは翻ると、「こどもまんなか」の保育が充分に行われていないことの傍証でもあるでしょう。しかしながら、子どもたち一人一人を本当に大事にする実践は簡単ではありません。先日、訪問した園では、劇遊びで何をするかを子どもたちが話し合っており、一人だけ違う意見になりました。その子のことを考え、2つともやったらとか、ミックスしようかという意見も出ましたが、やはり一つの劇がいいということで一致しました。そこで多数決になりかけたのですが、子どもたちから「多数決だったら、少ない人が嫌な思いするよね」「幼稚園最後の劇だから、みんながそれでいいというまで話し合おう」という意見が出て、さらに粘り強く話し合いが続いていきました。このように、保育者が決めてしまうのではなく、子どもたち一人一人の思いを大事にして、納得するまで話し合って自分たちの生活を創っていく保育は、効率が悪く、保育者にとっても大変なものです。しかし、この実践こそが「自分たちが当事者になって話し合い、誰一人取り残さず皆が納得する社会を創っていく」という、SDGsで目指されていることなのです。つまり、「こどもまんなか」の保育を志向し行っていくことは、SDGsの実践そのものと言ってよいでしょう。

一方でSDGsが扱っている内容は人の暮らしだけでなく、私たちを取り巻く地球環境の問題もあります。むしろ一般にはそのイメージが強いでしょ

う。実際、よい保育実践を行うことも、安定した地球環境の上に成り立っています。コロナ禍で保育が行えなかったり、最近の異常気象で夏に外で遊ぶことができなかったりなどの例を見ても、そのことは明らかです。では、保育実践と地球環境をどうつなげて考えればよいのでしょうか。それは幼児期にSDGsの知識を与えその活動をすればよいというものではないでしょう。そのキーになるのは、「人間まんなか」を超える視点をもった保育（暮らし）を実践できるかだと考えます。私たち人類は、生活が豊かになるために地球資源を利用し続けて、現在の環境問題を引き起こしてきました。地球資源を人間のために利用する発想は保育においても根強く、自然物を使ってどのように遊べるか、どう利用して子どもの発達につなげるかに関心が向きがちです。「こどもまんなか」保育実現のために自然を利用する視点しかないのであれば、自然を資源として利用する価値観を再生産することになりかねません。そこに、私たちの方が自然の中にお邪魔しているのだという感覚、自然の恵みを少し分けていただくという感覚、私たちが大きな循環の中にあるという感覚があるかが問われているのだと思います。保育者や身近な大人の「人間まんなか」を超えたものを感知し畏敬する生き方が、結果として子どもたちに伝播していくのでしょうか。

SDGs時代の私たちに課されているのは、一方では「こどもまんなか」保育を真に実現することです。それと同時にその保育を支えている存在を感知しつつ、「人間まんなか」を超えた保育や暮らしを体現することが求められているのでしょうか。保育は未来を創る最前線です。幼稚園教育要領の前文にある「持続可能な社会の創り手」を育てるためには、子どもの身近にいる私たち自身が「持続可能な社会の実践者」であり続けようとしているかどうかが問われているのではないのでしょうか。



## 能登半島地震によせて

全日本私立幼稚園連合会  
会長 田中 雅道

今年の正月は、能登半島の大地震で年が明けました。私の住んでいる京都でも、最初に大きな揺れを感じ、その後2回目の揺れの際には東日本大震災と同じような、大きなゆっくりした幅の広い揺れを感じ、これはどこかで大きな地震が起こったのだ、と直感しました。直後から、正月の番組は地震報道一色になりました。地震はいつ起こるか分からない、どこで起こるか分からないと頭では分かっているのですが、まさか元日に起こるとは誰も想像していなかったと思います。

その後、全日本私立幼稚園連合会でも全国に募金をお願いしたところ、この3月末の時点でかなりの額の義援金が全国から寄せられました。ありがとうございます。紙面をお借りして、全国の私立幼稚園・認定こども園の保護者・先生方の温かい支援に感謝申し上げます。

この義援金は、これから、地震被害のあった石川県、富山県、新潟県、などの先生方と協議し、有効に使っていきたいと考えています。私の個人的な考えではありますが、義援金の一部は能登半島にある、全日本私立幼稚園連合会の加盟園に通われている保護者の方々への「見舞金」として活用できないかと考えています。各個人によって今回の地震の被害は異なるとは思いますが、私立幼稚園・認定こども園に通っていた全ての園児が、この地震によって何らかの影響を受けたことは間違いのないと思います。日常を奪われ、園に通えなくなったり、避難所での生活を余儀なくされ、親子での楽しい時間を共有することが困難になったの方々に対して、何らかの形で見舞いを表明できればと考えています。

全国の我々の加盟園の関係者が今回の地震で被害を受けられた方々へ、直接、支援の声を伝えることはできませんが、頑張って復興を目指しておられる姿を、全国子どもたちや私立幼稚園・認定こども園の関係者が応援しているという思いを何らかの形で伝えられればと思っています。もちろん、組織で協賛していただいた大切な資金ですから、理事会などで慎重に協議を重ねて使途を決めていきたいと思っています。どのように活用されたかにつきましては、報告できる時が来ましたら、この紙面で報告させていただきます。

義援金を出して頂いた方の中には、石川県を中心に被害にあわれた全ての方々に思いを伝えられれば、という願いで拠出していただいた方も多くおられると思います。そのような方々の思いも尊重し、義援金を活用していきたいと思っています。幸い、現・石川県知事は、衆議院議員時代に幼児教育議員連盟の幹事や事務局長などの重責を担っていただいております。幼児教育に対する造詣も深く持っておられますので、石川県の全て子どもたちに対する資金の活用についても相談し、県として使っていただくことも考えています。いずれにしましても、この義援金が、被災された地域子どもたちのために、また、その地域の幼児教育施設の復興の一助として活用させていただくことをお約束申し上げます。温かいご支援ありがとうございました。